

文学博士春日政治著「西大寺本金光明最勝王經古點の國語学的研究」
に対する授賞審査要旨

本書は、天平時代書寫の金光明最勝王經十卷に対し平安朝初期に訓点を施したる奈良西大寺所藏の古鈔本につきて、其の訓点を闡明し、先づ之に依りて忠実なる書下し文を作り、然して後専ら其の字形及び語句を摘出して、之を國語史学的に研究したるものにして、乾坤二卷より成り、附するに詳密なる索引一冊を以てせり。乾の卷は古鈔原本の縮寫玻璃版全部の下に著者が訓点に基きて躬から試訳したる原文の延べ書きを録して新製したるものにして、仮名書き金光明最勝王經の全篇を成せり。

坤の卷は、古代の訓点が國語史の研究上、甚だ重要な所以を概説し、更に此の經典の書誌学的解説により、同經が本邦傳來の後、朝野の間に尊重誦誦せられ、漸次普及を見るに至れる徑路を略述したる後、訓点の各種を細誦し訓点の概要を展開し、以下、音韻、語彙、語法の三方面に亘りて極めて周密なる考証を盡くし、以て國語史及び文体史上に重要な新資料を提供したる所頗る多しとなす。

著者は、此の西大寺本金光明最勝王經の外、其の原本及び同時代附点の幾多古寫經の訓点研究自他の成果と奈良平安二朝の本邦古典の辞句との対照によりて、廣汎にして深刻せる考証を努めたるは勿論、明治末期以降三十有余年の間に現はれたる先進後進同学の徒の業績を参照せる所少しとせざれども、而も大に之を凌駕し之を擴充し之を完成したるに庶幾しとなす。

前人所説の批判是正等、皆くもすることなく、恒に臆断を慎み結論を急がず、而も独創と示唆とに富める点少

からざる等、其の公正堅実なる方法と態度とは、本著の国語史学に與ふる貢獻と共に、併せて之を頭彰するに足る。

抑も本書は、明治四十二年本院にて出版したる故大夫透博士著「仮名遣及仮名字体沿革史料」中の標本第五に基きて研究の端緒を捉へたるものにして、著者は曾て多年奈良に在りて、古くは大正年間同博士の訓点調査に協力しつゝ、自身研究の根柢を作りしが、近くは昭和十三年乃至十五年に亘りて本院の補助を得て、紹述の結果を收め、以て出藍の地を成したるものにして、国語学界に於ける此の範圍の貢獻としては副期的なるものと称するを得べし。著者の業績が今後逐次補充進展せらるべきものたることは当然にして、例へば最近奈良唐招提寺に於て遠藤嘉基学士が発見せし同時代古寫本金光明最勝王經零本の古訓研究によりて、著者の見解が証明確認せられしが如き事例ありと雖も、本著が従前現はれし這般の論考に對して、嶄然頭角を抽んでたるのみならず、向後後継専門学徒を誘導する軌範たるに適すべきを信す。

唯著者が微に入り細を穿つの餘り、国語變遷史上の全般の展望と概括とを闕却せるが如き觀あるを惜まざるを得ず。而も此の種の古訓点の闡明は、古典文学の遺を拾ひ關を補ひ、上は記紀万葉等の訓義解釈に一新光明を興ふると共に、下は平安朝文学原形仮想本の逸漏を填充すべき点に於て、国語史上に寄與する所少からざるのみならず、国文学史上にも裨益する所亦看過すべきにあらざるなり。

以上の理由により本書は授賞の價値あるものと認む。